

ニホンザルの保護管理に関する  
レポート  
(平成25年度版)

2014年3月

環 境 省



## はじめに

環境省では、2012（平成 24）年度よりニホンザルの生息状況や被害の現状の確認と対策の評価を行い、保護管理に関する基本的な考え方や課題等について整理を行うこと等を目的としてニホンザル保護管理検討会を設置しました。

今後、定期的に保護管理に関する最新情報を「保護管理に関するレポート」として取りまとめ、2010（平成 22）年に作成された「特定計画作成のためのガイドライン」について随時補足を行っていく予定です。

なお、本レポートは上記ガイドラインの内容をご存知の方を対象として作成しております。

- 2013（平成 25）年度のニホンザルの保護管理をめぐる動き 2p
- 今年度のレポートのテーマ 2p
- 計画的な保護管理の必要性 3p
- 計画的な保護管理に向けた現況把握 9p

## 2013（平成25）年度の二ホンザルの保護管理をめぐる動き

2013（平成25）年

4月：和歌山県において「和歌山県二ホンザル保護管理計画」が策定されました。

## 今年度のレポートのテーマ

2012（平成24）年度に作成した保護管理レポートでは、二ホンザルの保護管理上の主要課題を抽出しました。2013（平成25）年度は、その課題の中から優先度が高いと考えられる「特定計画の策定が進んでいない」、「群れの状況把握が十分でない」という2つの課題を取り上げ、その解決に向けて情報の収集、検討を行いました。まず情報の収集のため、特定計画の策定が進んでいない原因の解明と、捕獲やモニタリングの実態把握を目的に、二ホンザルが分布する43都府県の鳥獣行政担当者を対象にアンケート調査を実施しました。さらに、より詳細な情報を収集するために行政担当者や専門家へのヒアリングを実施しました。その結果、行政担当者が、二ホンザルについて特定計画を策定するメリットがないと考えているなど二ホンザルの保護管理に対する認識が不足していることが考えられました。また多くの地域で捕獲や被害対策などの実施主体が市町村となっていることから、都府県の鳥獣行政担当者が二ホンザルの生息状況や被害状況を正確に把握していない可能性が高いと考えられました。

そこで今年度のレポートでは、二ホンザルの保護管理に関わる行政担当者を対象に、二ホンザルの保護管理について理解を深めてもらうために、計画的な管理の必要性について具体的な事例を交えて紹介します。また計画的な管理を進めるための第一歩として、二ホンザルの現況（生息状況や被害状況）を把握するための調査方法についても紹介します。

## 計画的な保護管理の必要性

### 1. ニホンザルの特性と計画的な保護管理の必要性

#### (1)ニホンザルの生態・特性

- ・ 基本的に数十頭からなる母系の群れをつくり、一定の行動域内で生活します。
- ・ 群れは、個体数の増加などによって、分裂することがあります。
- ・ 分布域は、個体数の増加だけでなく、群れ数の増加によっても拡大します。
- ・ 体の大きさは比較的小さく、前肢（手）を器用に使って木に登るなど運動能力が高く、三次元的な空間利用ができます。
- ・ 運動能力だけでなく、学習能力も高いため、対策には工夫が必要です。
- ・ 農作物などを食べて栄養状態がよくなれば、最初に出産する年齢が早まったり、出産間隔が短くなる場合があります。

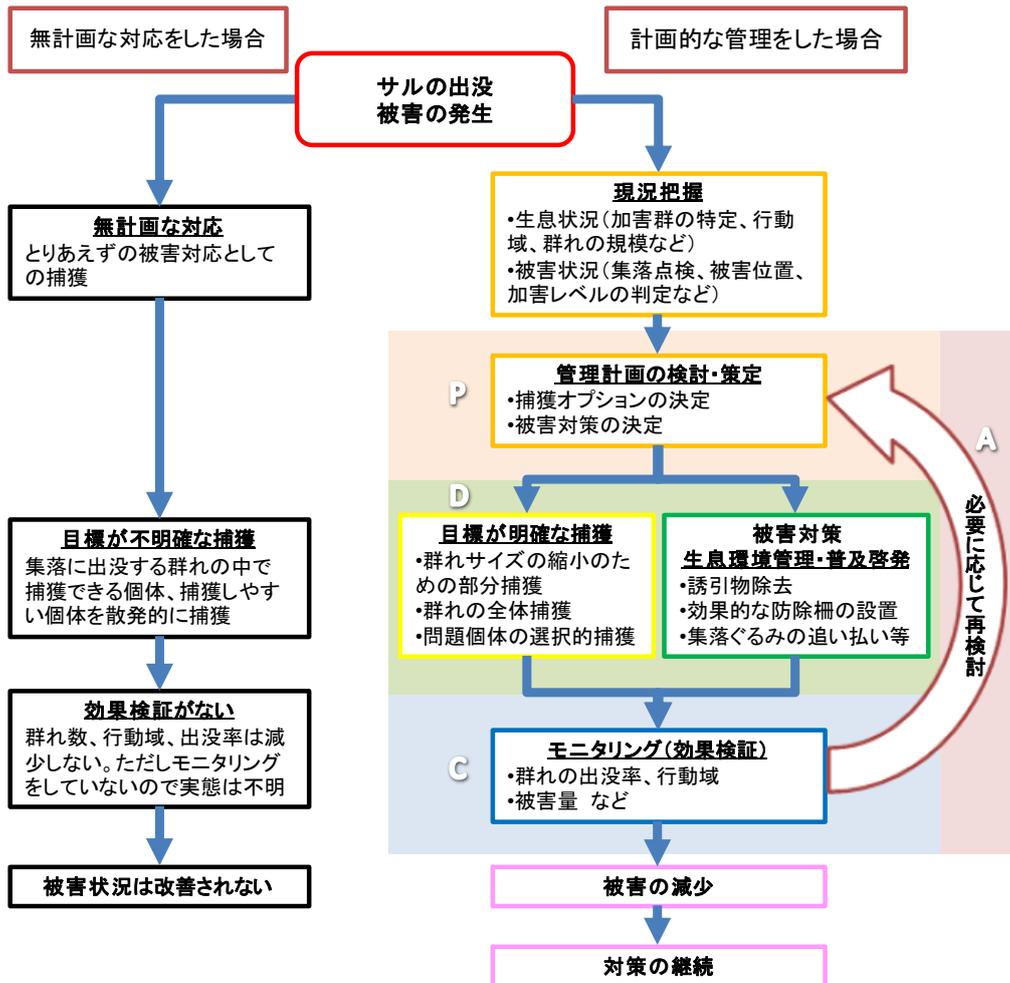
#### (2)ニホンザルによる被害の特徴

- ・ 農作物など栄養価の高いものを安全に食べられることを学習すると、集落に繰り返し出没するようになります。
- ・ 人慣れなど密度に依存しない被害発生要因が影響して、対策をとらないでいると人慣れが進んで被害が悪化し、農業被害だけでなく、人家侵入などの生活環境被害も引き起こします。
- ・ 被害の程度は、人慣れの度合いなどによって群れごとに異なります。
- ・ 群れで出没するため、一度に広範囲に被害が出ることや短時間でも大きな被害が出る場合があります。
- ・ 昼行性であるため、被害者の目の前で被害を受けることから、被害者の精神的なダメージが大きくなり、営農意欲の減退を招く場合があります。
- ・ 対策をとらないと、農作物を食べることによって群れの餌条件が良くなり、加害する個体数や群れ数が増え対策がより困難となります。

#### (3)群れ管理の必要性

- ・ 被害は、被害を出す群れ（加害群）の行動域内で発生しますが、群れは季節ごとに餌のある環境を求めて移動することから、被害発生地は必ずしも一定ではありません。
- ・ 被害を軽減するためには、やみくもに捕獲をして個体数を減らすだけでは、効果はあがりません。加害群を特定し、その行動域や規模などを把握した上で、群れごとに目標を決めて捕獲することが必要です。
- ・ 加害群の分裂は、新たな加害群を生み出すため、群れが分裂しないように群れ内の個体数の管理が必要です。
- ・ ニホンザルの保護管理には、個体群管理、被害対策、生息環境管理の3つを、地域の状況に応じて適切に組み合わせて、計画的に実施することが必要です。

- ・ニホンザルの個体群管理では、群れ管理が基本となり、群れの分布域、群れ数、群れ内の個体数（群れサイズ）、群れ内の問題個体の管理を、目標を明確にして行う必要があります。
- ・計画的な個体群管理を実施するだけでなく、農作物に依存した群れを本来の生息地に戻し、本来あるべき状態に戻すことが重要です。そのためには、農地の防除や追い払い等による被害対策と、誘引要因の除去等の生息環境管理を併せて実施する必要があります。



計画的な管理と無計画な対応のイメージ図

## 2. 特定計画に基づく保護管理事例

ここでは特定計画を策定し、計画的な捕獲の実施を進め成果をあげている滋賀県の事例をとりあげます。事例の前に、計画的な捕獲について、現時点での基本的な考え方を示します。

### (1) 計画的な捕獲オプション

計画的な捕獲を実施する上で、以下のような捕獲オプションがあります。計画的な捕獲に当たっては、各都府県の群れの分布に配慮しながら、加害群の現況を把握した上で目的・目標を明確にして捕獲オプションを選択し、実施することが必要です。

### ① 悪質な個体の選択的捕獲

人を威嚇したり、人家侵入を繰り返したりするなどの問題行動をとるサル（ハナレザルの特定個体もしくは群れの中の特定個体）を選択的に捕獲します。

### ② 群れサイズを小さくするための部分捕獲

サルの群れは、一般的に70～80頭を超えると分裂しやすくなると言われています。群れが分裂すると、被害地域が拡大することにつながるため、群れが分裂することを防止するために、群れのサイズを小さくするための捕獲を行います。

また群れのサイズが大きいと、追い上げや追い払いがしにくいため、対策が行いやすい50～60頭くらいまで群れのサイズを小さくする捕獲を行います。

### ③ 群れの全体捕獲

極度に人慣れが進んでいるなど、特に悪質性の高い群れで、周囲に他の群れが分布していて、追い上げるような山がない場合などは、状況によっては群れ全体を捕獲し、群れの数进行を少なくします。

## (2) 特定計画に基づいた計画的な捕獲事例

特定計画を策定し、計画的な捕獲が実施され効果をあげた事例として、滋賀県の個体数調整の事例を紹介します。

### <滋賀県の特定計画の特徴>

#### ● 個体数調整と有害鳥獣捕獲の位置づけの明確化

滋賀県では、群れによる被害が非常に大きく、防除対策のみでは被害の軽減ができない群れについて、群れ数を減らす場合や群れの個体数を調整する場合は、部分捕獲や全頭捕獲の個体数調整で行うこととしています。また、有害鳥獣捕獲は、農林業または生活環境に係る被害防止のための緊急避難措置とし、基本的に加害個体の除去に限り許可することとしています。

#### ● 複数指標に基づく加害レベルの評価

群れごとに「サルの出現回数」「被害発生頻度」「サルの様子（群れの人慣れ程度）」の3指標を点数化し、その平均値を加害レベルのランクとして設定しています。10段階に区分されており、加害レベルに応じた防除対策手法が整理されています。また、部分捕獲と全頭捕獲の実施要件が複数の観点から整理されています。

#### ● 県と市町の明確な役割分担

県が全体の管理計画である特定計画を策定し、その捕獲要件に基づいて市町が地域実施計画を策定・実行しています。群れの状況把握や捕獲、事後モニタリングは市町が実施し、県は被害対策の支援やマニュアルの整備、研修会の開催等を実施しています。また、モニタリングが十分に行えない市町については、県がサポートする仕組みとなっています。

## <滋賀県の個体数調整の事例>

### A 群の事例（群れの全頭捕獲）

#### ➤ 被害の発生

市街地へ出没し人家へ侵入するなど生活環境被害を頻発させ、加害レベルが 9 と高い 50 頭程度からなる群れ。住民の被害意識も非常に高く一刻の猶予も許さない状況。

#### ➤ 計画的な管理の実施

特定計画の捕獲要件に基づき地域実施計画を策定し、大型捕獲檻を使って群れの 30% を捕獲する部分捕獲を実施したが、被害が十分に軽減しなかった。周囲には他の群れが密集しており、追い上げることが難しい状況のため、大型捕獲檻を使って全頭捕獲を実施した。捕獲方針を決定するにあたり、専門家や関係機関からなる検討委員会を複数回開催し、十分な協議を重ね合意形成を図った。全体捕獲後は隣接群が捕獲対象群の行動域に侵入しないよう、追い払いを実施した。

#### ➤ 効果

全頭捕獲から 5 年経過後も新たな群れが定着することはなく、被害は発生していない。

### B 群の事例（群れの部分捕獲）

#### ➤ 被害の発生

最大で 260 頭にもなる群れで、出没頻度や被害発生頻度が高く、加害レベルは 8。追い払いや防護柵の設置などの被害防除を実施したが、群れが大きすぎて十分な効果があがらなかった。

#### ➤ 計画的な管理の実施

被害防除を実施する上で、管理しやすい頭数に調整するため、特定計画の捕獲要件に基づき地域実施計画を策定し、群れの半数の 130 頭を大型捕獲檻を使って捕獲した。捕獲にあたっては、個体数や群れの特性、行動域などの調査を実施した。また、追い払いの体制整備や防護柵の設置、集落環境点検に基づき刈り払いを実施する等、被害防除を徹底した。

#### ➤ 効果

農作物の被害金額が減少した。また、住民の被害意識も軽減した。しかし、集中して利用している地域ではいまだに被害は多発している。

### C 群の事例（群れの選択的多頭捕獲）

#### ➤ 被害の発生

76 頭からなる群れで、出没頻度や被害発生頻度が高く、人への威嚇も確認された。加害レベルは9と高い。

#### ➤ 計画的な管理の実施

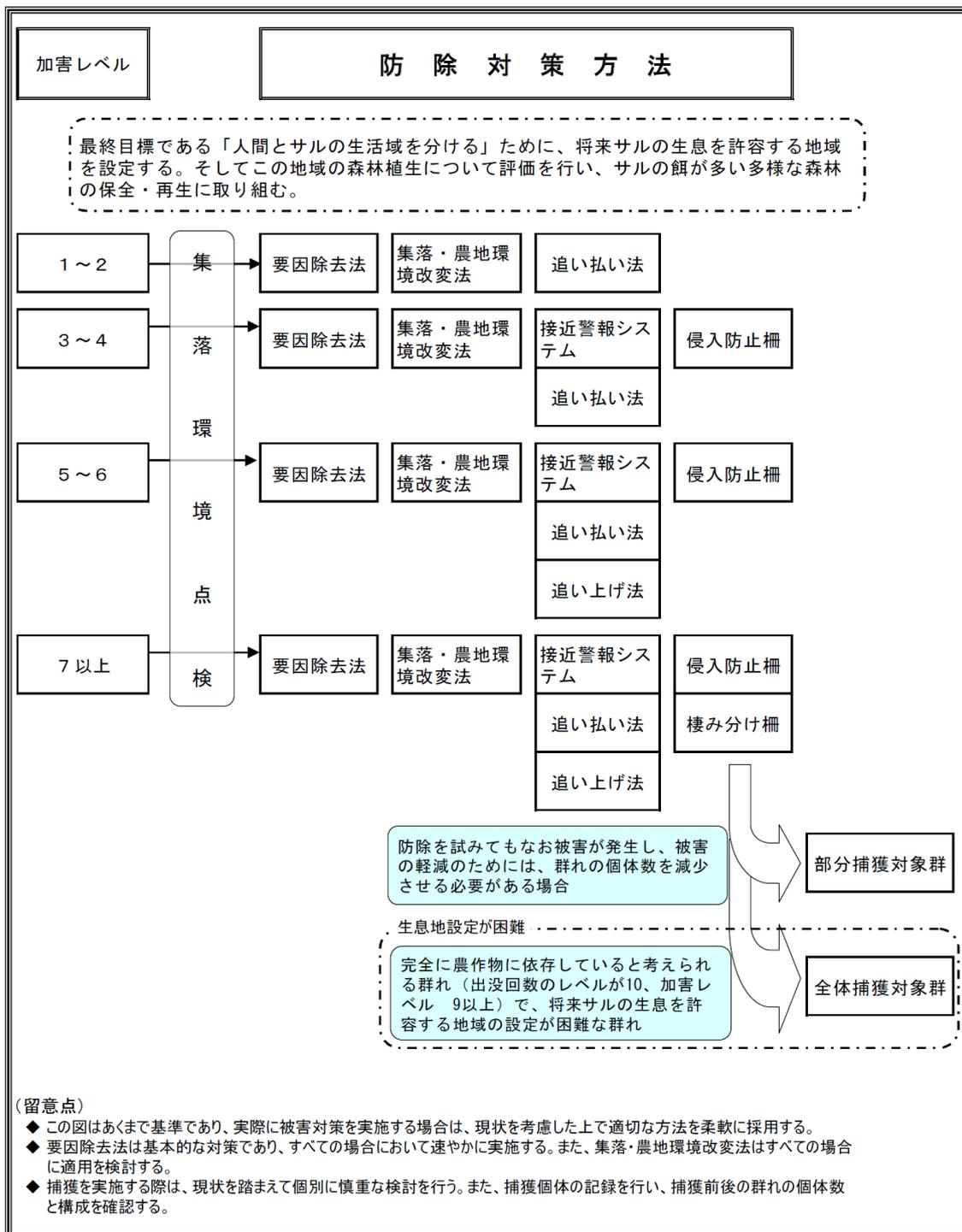
群れサイズは大きくないが、加害レベルの高い群れに対し、特定計画の捕獲要件に基づき地域実施計画を策定し、悪質な個体を特定し選択的に捕獲した。25 頭を捕獲し、群れサイズを縮小させた。発射音の小さい麻酔銃を中心に使用し選択的に捕獲することで、サルが捕獲者を危険と認識して捕獲が困難となる状況を回避するよう配慮した。群れの分裂を防ぐため、高順位の成獣メスは標的外とした。

#### ➤ 効果

悪質な個体を排除し、群れサイズが縮小したため、農地や市街地への出没頻度が低下した。人馴れ度も改善され、加害レベルが低下した。捕獲後も群れは分裂していない。

### (3) 滋賀県の事例からみる計画的な管理の必要性

主に捕獲に関する事例を取り上げましたが、これらの事例に共通することは、目標や目的を明確にした管理方針を策定した上で、それを達成するために適した捕獲、追い払いや防護柵の設置等の管理オプションを選択・実施し、効果検証を行っている点です。冒頭で触れたように、ニホンザルは群れで行動し、高い学習能力を持つため、計画性なく捕獲や被害防除を実施しても十分な効果はあがりません。被害を軽減するには、群れの生息状況や被害状況を把握し、個々の状況に応じた対策（管理オプション）を選択することが重要です。ただし、計画的に進めても、最初から成果が上がるとは限りません。十分な成果が出ない場合は、その原因を検証して次の計画に活かすことが重要です。



### 加害レベルに応じた被害対策のオプション

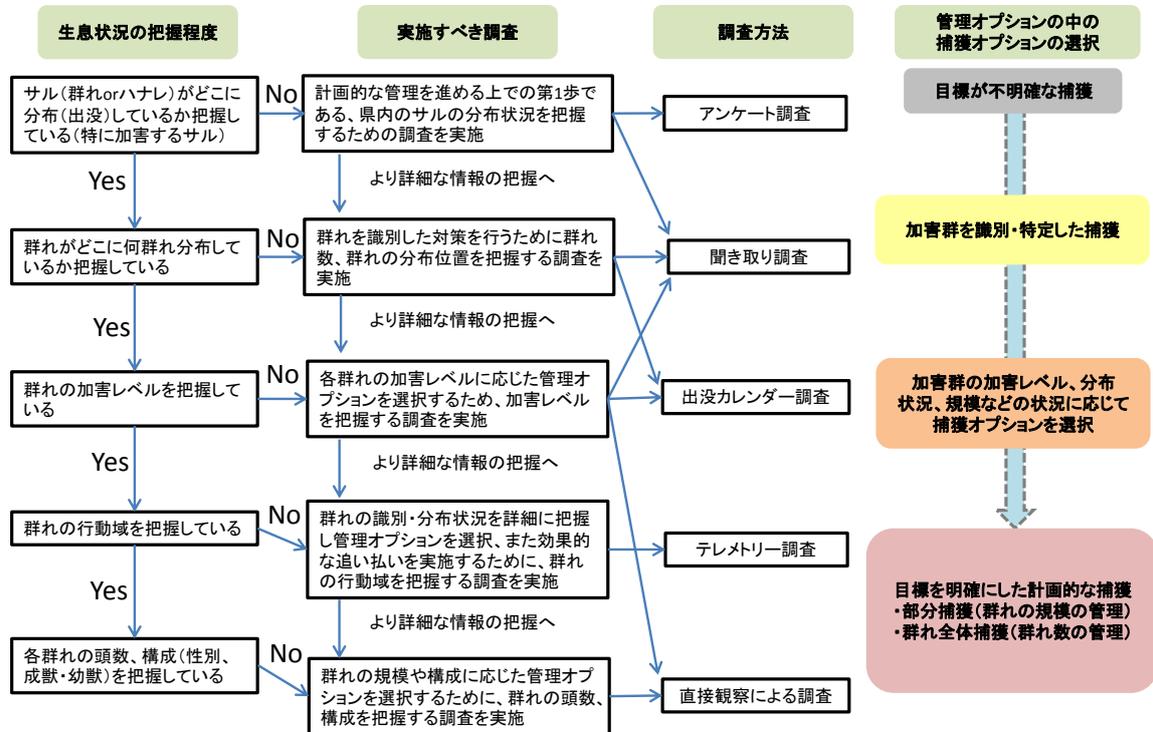
出典：滋賀県(2012)滋賀県ニホンザル特定鳥獣保護管理計画(第3次)

## 計画的な保護管理に向けた現況把握

計画的なニホンザルの管理を進めるためには、現況把握（生息状況、被害状況）は不可欠です。ここではその調査方法を紹介します。

### 1. 生息状況調査

ニホンザル（特に加害するもの）の生息状況、すなわち群れもしくはハナレザルがどこに生息しているのか、群れがどの程度分布し、どの程度の規模なのか、またどのような場所を利用しているのかといった情報は、計画的な管理のための基本となる情報です。計画的な管理を行うためには、まずは加害群及びその周辺の群れの生息状況を把握した上で、群れの状況に応じて目標を設定し、捕獲、追い上げ、追い払い、防除柵の設置等の管理オプションを選択する必要があります。生息状況を把握するための調査方法は様々なものがありますが、調査方法により把握できる内容は異なります。そこで把握する内容毎にどのような調査方法があるかを整理したものが下図です。図の下に位置する調査方法ほど詳細な生息状況を把握できます。また、調査の規模や期間等にもよりますが、大まかには下に位置する調査方法ほど費用や労力がかかり、調査者に専門性が求められます。



生息状況の把握程度に基づく実施すべき調査の選択フロー

## (1) アンケート調査

### 調査方法

広域での分布状況を把握するために、市町村の鳥獣行政担当者、鳥獣保護員、猟友会、森林組合、農協などにアンケート調査用紙と地図を郵送等により配布し、分布情報を記入、返送してもらう方法。

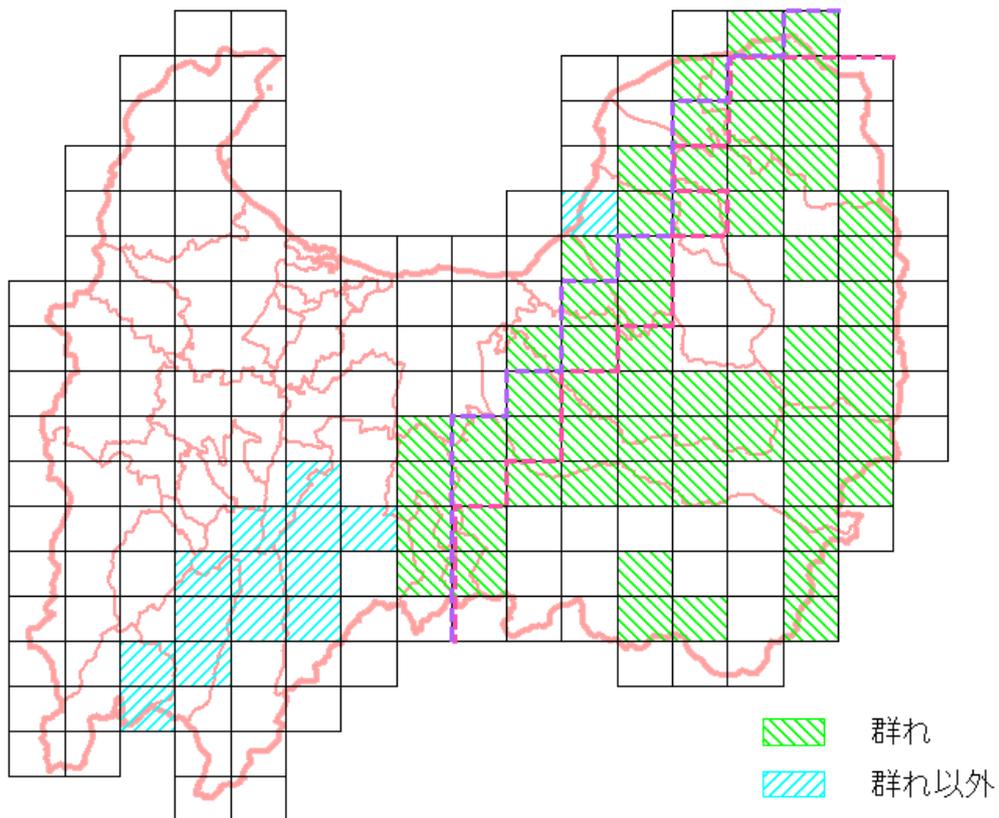
### メリット

- 比較的少ない予算、労力で広域の情報を収集できる。
- 専門家以外でも実施できる。

### デメリット

- 対象者の記憶に依るため、情報が不正確な場合がある。
- 聞き取り調査と比べ誤記が多い。

➤ ニホンザルの計画的な管理を行うための基礎情報である県内での分布状況を把握することを目的としたアンケート調査を実施した例



アンケート調査に基づく群れの分布図

出典：(財)自然環境研究センター(2003)平成14年度ニホンザル管理計画基礎調査報告書

## (2) 聞き取り調査

### 調査方法

分布状況等を把握するために、市町村の鳥獣行政担当者、鳥獣保護員、猟友会員などを対象に、面接聞き取りを行う方法。

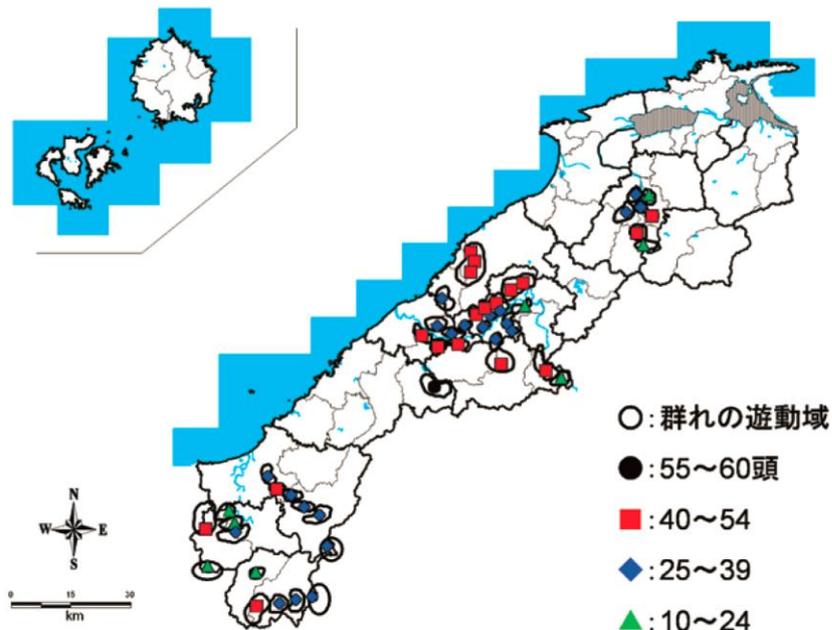
### メリット

- 対話式で進めるため、アンケート調査よりも詳細な情報を得ることが可能。群れやハナレザルの分布（いる or いない）だけでなく、大まかな群れの数や群れの個体数、行動域、加害状況等を把握できる。
- 情報を地図化する際の誤記を少なくすることができる。

### デメリット

- 現地に赴き、情報を収集する必要があるため、アンケート調査よりも時間や労力がかかる場合が多い。
- 対象者の記憶に依るため、情報が不正確な場合がある。

- 群れを識別し、加害レベルに応じた対策を行うために、群れの分布や群れ数、群れごとの大まかな個体数・行動域を把握することを目的とした聞き取り調査を実施した例



聞き取り調査に基づく群れの個体数と行動域の推定結果

出典：澤田誠吾・金森弘樹(2010) 島根県における二ホンザルの生息実態調査(V)

### (3) 出没カレンダー調査

#### 調査方法

分布状況や群れの数等を把握するために、あらかじめ調査用紙を市町村の鳥獣行政担当者や住民等に配布しておき、群れを目撃した日時や場所、頭数等を一定期間一斉に記録してもらう方法。

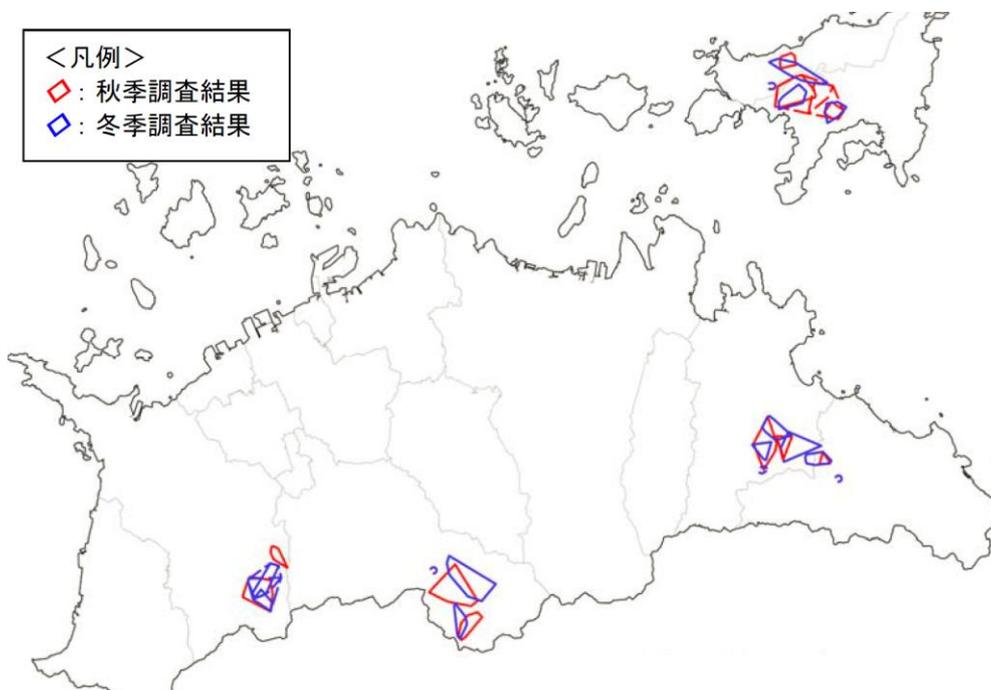
#### メリット

- 群れの分布だけでなく、群れの数や大まかな群れの個体数、加害状況等を把握できる。
- 目撃した都度用紙に記入してもらうため、記憶に依るアンケート調査や聞き取り調査よりも正確な情報を得ることができる。

#### デメリット

- データの集計・解析に時間や労力がかかる。
- アンケート調査よりも回答者の労力が大きい。

- 群れを特定し、加害レベルに応じた対策を検討するために、群れの分布、群れ数、大まかな群れの個体数、加害状況を把握することを目的とした出没カレンダー調査を実施した例



出没カレンダー調査により推定された群れの分布

出典：(株)野生動物保護管理事務所(2013) 平成24年度香川県ニホンザル生息状況等調査業務報告書

#### (4)テレメトリー調査

##### 調査方法

群れの行動域を把握するために、群れのメスの成獣に電波発信機を装着し、発信機からの電波を受信することにより、群れの位置を推定する方法。一定期間、継続して調査することで、群れの行動域を推定することができる。最近では、GPSを利用した発信機も使われており、従来の発信機よりも少ない労力で高精度の位置情報を得ることができる。

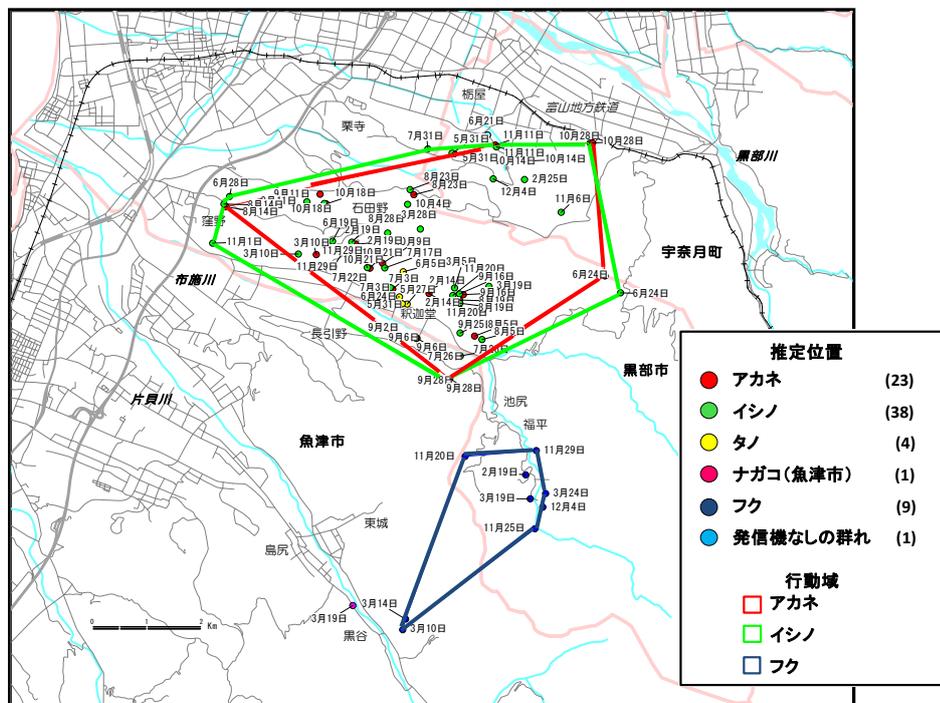
##### メリット

- 複数の群れの個体に発信機を装着することにより、群れの識別ができる。
- 群れの位置を把握することにより集落への接近警報を出すことができるなど、被害対策にも利用できる。

##### デメリット

- 発信機を装着するために、個体を捕獲しなくてはならない。
- 電波発信機は、電波の受信、位置の推定に労力がかかり、一定の経験・技術を要する。
- GPS 発信機は、受信、位置の推定の労力がかからないが、高価である。

- 群れの識別、分布状況を把握し、捕獲オプションの選択、また効果的な追い払いを実施するために、群れの行動域の把握を目的としたラジオテレメトリー調査を実施した例



ラジオテレメトリーによる群れの行動域の推定結果

出典：(財)自然環境研究センター(2003)平成14年度ニホンザル管理計画基礎調査報告書

- 電波発信機を用いたラジオテレメトリー法とGPS発信機を用いたGPSテレメトリー法の比較

比較項目	ラジオテレメトリー法	GPSテレメトリー法
精度	低い	高い（植生や地形の影響を受ける）
奥山での測位	困難	容易
測位の労力	大きい	小さい
機材の費用	安価	高価

## (5) 直接観察による調査

### 調査方法

群れを直接観察することで、群れの個体数や性別、年齢構成を把握する方法。複数の調査者での観察やビデオ撮影を併用することで精度を上げることができる。

### メリット

- 聞き取りや出没カレンダーよりも、正確に群れの個体数を把握することができる。
- 聞き取りや出没カレンダーでは把握が困難な、性別や年齢構成の情報を得ることができる。

### デメリット

- 調査地によって条件は異なるが、群れ全体の個体数や構成を把握できる機会は限られていることが多いので、調査に時間がかかる。
- 目視で性別や年齢を判定するには、一定レベルの知識と経験が必要。

- 群れの規模や構成に応じた捕獲オプションを選択するために、群れの個体数と構成を把握することを目的に直接観察調査を実施した例

直接観察による群れの個体数の調査結果

地域 個体群	群れ	オトナ			ワカモノ			コドモ	0歳	不明	推定 生息数	調査 年度
		メス	オス	不明	メス	オス	不明					
豊岡	城崎A	11	5	0	0	1	1	8	5	0	31	H23
美方	美方A	11	5	0	3	2	1	12	1	0	35	H23
大河内 ・生野	大河内A	17	5	0	1	1	5	12	2	0	43	H23
	大河内B	21	3	0	6	2	1	21	2	0	56	H23
	大河内C	47	9	2	6	7	6	30	17	2	126	H22
篠山	篠山A	20	6	0	1	2	4	22	11	0	66	H23
	篠山B	11	3	0	0	0	1	9	8	0	32	H23
	篠山C	8	6	0	2	1	1	12	3	0	33	H23
	篠山D	9	4	0	0	0	3	13	6	0	35	H23
佐用	佐用餌場群	20	5	0	7	3	0	36	5	0	76	H23
淡路	淡路餌場群	106	14	0	13	3	13	115	46	0	310	H23
合計											843	

※コドモは1~3歳、ワカモノは4~6歳、オトナは7歳以上。

出典：兵庫県森林動物研究センター(2013) 兵庫県におけるニホンザル地域個体群の管理手法、兵庫ワイルドライフモノグラフ5号。

## 2. 被害状況調査

二ホンザルの管理を実施する上で、生息状況を把握するだけでなく、被害状況を把握することも重要です。しかし、被害状況の正確な把握は難しく、労力もかかるため、十分な質・量の情報を把握している自治体は限られます。そこで、比較的手軽に実施でき、個体数調整や被害管理を実施する上で必要な精度の情報を得ることができる調査方法を紹介します。

### (1) 農業集落単位の被害アンケート調査

#### 調査方法

集落単位の被害状況を把握するために、集落の農業関係の代表者などに、その集落の農業被害と対策状況を回答してもらう方法。

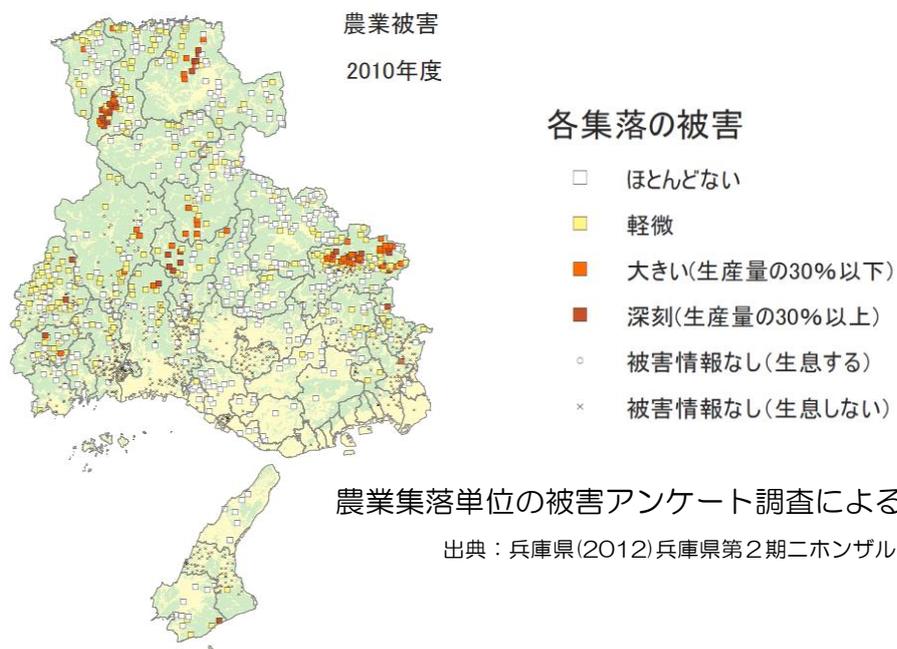
#### メリット

- 市町村単位よりも細かい集落単位の被害状況を、広範囲で把握できる。
- 比較的少ない予算や労力で情報を集めることができる。
- 農業被害だけでなく、生活環境被害についても情報収集が可能。

#### デメリット

- データの集計や分析に時間がかかる。
- 個人の感覚により回答が左右される傾向がある（ただし、広域で継続的に多くの回答を得ることで、十分な精度の情報を得ることが可能）。

- 被害状況の把握と計画的な管理の効果をモニタリングするために、集落単位の農業被害状況の把握を目的とした被害アンケート調査を実施した例



鳥獣害アンケート調査シート(2008年)

提出用 1

兵庫県 市・町 地区 記入者 氏名 役職 郵便番号 住所

電話番号 記入年月日 (郵便番号や住所などの情報は)

防護柵	設置	防除対象の動物(いくつでも)	設置率	主な設置者
のり網	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし		農地の _____ %を囲っている	<input type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 集落
電気柵	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし		農地の _____ %を囲っている	<input type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 集落
金網柵	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし		農地の _____ %を囲っている	<input type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 集落
トタン柵	<input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし		農地の _____ %を囲っている	<input type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 集落
その他の柵( )			農地の _____ %を囲っている	<input type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 集落

地図の複製や、万一連絡が必要になった時のために記入して頂いています。お名前を含めて一切外部に出すことはありません。

20年の集落周辺の樹木の実り(営利栽培は除く)	
クリ	(豊作・平年並み・凶作・不明・木まない)
カキ	(豊作・平年並み・凶作・不明・木まない)

被害作物名には「野菜」や「イモ類」などではなく、具体的な作物の名前を記入してください

集落ぐるみの防護柵について、お答え下さい。	
設置を(している・検討中・考えていない)	よろしければ左の課題について、具体的に記入下さい。
設置について集落の合意形成に問題が(ない・ある)	
設置費用についての問題は(ない・ある)	
柵の延長は(必要・不要)	
柵の機能の改善は(必要・不要)	
補修や管理についての問題は(ない・ある)	
対象動物と柵の種類との適合性の問題は(ない・ある)	
放棄作物等の誘引物の撤去は(できていない・できていない)	

対象動物	20年の農業被害	被害の動向	主な被害と時期		実施した被害対策とその効果(20年) 防護柵についてはこれまでに設置したものを含まず	20年の出没	動物の増減	その他お気づきの点や工夫など、 ご自由にお書き下さい
			被害作物名	月				
シカ <input type="checkbox"/> いる →(通年・春～秋だけ・不明) <input type="checkbox"/> いない (→右は記入不要)	農業被害は <input type="checkbox"/> ほとんどない <input type="checkbox"/> 軽微 <input type="checkbox"/> 大きい(生産量の30%未満) <input type="checkbox"/> 深刻(生産量の30%以上)	被害は昨年より <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った			<input type="checkbox"/> 何もしなかった <input type="checkbox"/> 有害捕獲 ( _____ 頭ぐらい分らない) →被害を減らす効果 (あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> 防護柵 →効果(あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> その他 _____ →効果(あり・なし・不明)	農地・集落の周辺で <input type="checkbox"/> あまり見ない <input type="checkbox"/> たまに見る <input type="checkbox"/> よく見る	昨年と比べて <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った <input type="checkbox"/> わからない	
イノシシ <input type="checkbox"/> いる <input type="checkbox"/> いない (→右は記入不要)	農業被害は <input type="checkbox"/> ほとんどない <input type="checkbox"/> 軽微 <input type="checkbox"/> 大きい(生産量の30%未満) <input type="checkbox"/> 深刻(生産量の30%以上)	被害は昨年より <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った			<input type="checkbox"/> 何もしなかった <input type="checkbox"/> 有害捕獲 ( _____ 頭ぐらい分らない) →被害を減らす効果 (あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> 防護柵 →効果(あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> その他 _____ →効果(あり・なし・不明)	農地・集落の周辺で <input type="checkbox"/> あまり見ない <input type="checkbox"/> たまに見る <input type="checkbox"/> よく見る	昨年と比べて <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った <input type="checkbox"/> わからない	
ニホンザル <input type="checkbox"/> いる <input type="checkbox"/> いない (→右は記入不要)	農業被害は <input type="checkbox"/> ほとんどない <input type="checkbox"/> 軽微 <input type="checkbox"/> 大きい(生産量の30%未満) <input type="checkbox"/> 深刻(生産量の30%以上)	被害は昨年より <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った			<input type="checkbox"/> 何もしなかった <input type="checkbox"/> 有害捕獲 ( _____ 頭ぐらい分らない) →被害を減らす効果 (あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> 防護柵 →効果(あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> その他 _____ →効果(あり・なし・不明)	農地・集落の周辺で <input type="checkbox"/> あまり見ない <input type="checkbox"/> たまに見る <input type="checkbox"/> よく見る	昨年と比べて <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った <input type="checkbox"/> わからない	<input type="checkbox"/> 子供を連れだしたメスの群れがいる <input type="checkbox"/> 1～数頭の離れザル(オス)だけがいる
ツキノワグマ <input type="checkbox"/> いる <input type="checkbox"/> いない (→右は記入不要)	農業被害は <input type="checkbox"/> ほとんどない <input type="checkbox"/> 軽微 <input type="checkbox"/> 大きい(生産量の30%未満) <input type="checkbox"/> 深刻(生産量の30%以上)	被害は昨年より <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った			<input type="checkbox"/> 何もしなかった <input type="checkbox"/> 有害捕獲 ( _____ 頭ぐらい分らない) →被害を減らす効果 (あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> 防護柵 →効果(あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> その他 _____ →効果(あり・なし・不明)	農地・集落の周辺で <input type="checkbox"/> あまり見ない <input type="checkbox"/> たまに見る <input type="checkbox"/> よく見る	昨年と比べて <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った <input type="checkbox"/> わからない	
ヌートリア <input type="checkbox"/> いる →明/大/昭/平 _____ 年頃迄 <input type="checkbox"/> いない (→右は記入不要)	農業被害は <input type="checkbox"/> ほとんどない <input type="checkbox"/> 軽微 <input type="checkbox"/> 大きい(生産量の30%未満) <input type="checkbox"/> 深刻(生産量の30%以上)	被害は昨年より <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った			<input type="checkbox"/> 何もしなかった <input type="checkbox"/> 有害捕獲 ( _____ 頭ぐらい分らない) →被害を減らす効果 (あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> 防護柵 →効果(あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> その他 _____ →効果(あり・なし・不明)	農地・集落の周辺で <input type="checkbox"/> あまり見ない <input type="checkbox"/> たまに見る <input type="checkbox"/> よく見る	昨年と比べて <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った <input type="checkbox"/> わからない	<input type="checkbox"/> 堤防に穴をあける <input type="checkbox"/> 田のあぜを壊す <input type="checkbox"/> 養殖していたことがある _____ 年頃
アライグマ <input type="checkbox"/> いる →明/大/昭/平 _____ 年頃迄 <input type="checkbox"/> いない (→右は記入不要)	農業被害は <input type="checkbox"/> ほとんどない <input type="checkbox"/> 軽微 <input type="checkbox"/> 大きい(生産量の30%未満) <input type="checkbox"/> 深刻(生産量の30%以上)	被害は昨年より <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った			<input type="checkbox"/> 何もしなかった <input type="checkbox"/> 有害捕獲 ( _____ 頭ぐらい分らない) →被害を減らす効果 (あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> 防護柵 →効果(あり・なし・不明) <input type="checkbox"/> その他 _____ →効果(あり・なし・不明)	農地・集落の周辺で <input type="checkbox"/> あまり見ない <input type="checkbox"/> たまに見る <input type="checkbox"/> よく見る	昨年と比べて <input type="checkbox"/> 増えた <input type="checkbox"/> 変わらない <input type="checkbox"/> 減った <input type="checkbox"/> わからない	<input type="checkbox"/> 家庭に住みつくなどの衛生被害がある

※アライグマ、タヌキ、ハクビシン、アナグマの見分け方は別冊「中型哺乳類の見分け方」を参考して下さい

カッコ内から選択 丸をつけてください

裏面(提出用2)の記入も、よろしくお願いします。

農業集落単位の被害アンケート調査の調査票

出典：兵庫県森林動物研究センター(2010) 農業集落アンケートからみるニホンジカ・イノシシの被害と対策の現状 兵庫ワイルドライフモノグラフ2号



平成 25 年度

ニホンザルの保護管理に関するレポート

2014 年 3 月

環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護業務室  
〒100-8975 東京都千代田区霞が関 1 丁目 2 番 2 号  
電話：03(3581)3351（代表）

業務請負者 一般財団法人 自然環境研究センター  
〒130-8606 東京都墨田区江東橋 3 丁目 3 番 7 号  
電話：03(6659)6310（代表）

リサイクル適正の表示：印刷用の紙にリサイクルできます。  
この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料「A ランク」のみを用いて作製しています。